

プログラム

デュオ

フランス組曲 第6番-----J.S.バッハ

アルマンド、クーラント、サラバンド、ガボット 編曲 織田英子

ポロネーズ、メヌエット、ブーレ、ジーク

RAIN BOX(1989年)-----織田英子

ソロ

セレナータ マリンバーナ(1965年)-----外山雄三

ハンガリア狂詩曲-----D.ポッパー

＜ 休 憩 ＞

トリオ

楽しい小品集'92 -----編曲 織田英子

愛の挨拶 E.エルガー

楽興の詩 F.シューベルト

紡ぎ歌 F.メンデルスゾーン

月の光 C.ドビュッシー

スペイン舞曲 M.ファーリャ

ハンガリア舞曲第2番 J.ブラームス

タンゴ I.アルベニス

1992年1月11日(土) 3:00PM ノバホール

マリンバ：明瀬 由武 山口 多嘉子 田辺 由紀

ピアノ：高瀬 奈美 作曲：織田 英子

♯ごあいさつ

明瀬 由武

本日はお忙しいところをお越しくださしまして、誠にありがとうございます。私がこどもの頃から奏いてきたマリンバを皆様に紹介し、その魅力を知っていただけますように本日の演奏会を開きます。

マリンバの演奏会というと、難解な現代作品が多いのですが、作曲家織田英子さんの協力を得まして、ソロ、デュオ、トリオの親しみやすいプログラムを組むことができました。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

この場を借りまして、カットの古山浩一氏、会を催すためにご協力くださったたくさんの方々に心よりお礼申し上げます。

聴 き ど こ ろ

作曲家：織田 英子

明瀬さんがソロ、デュオ、トリオ、とマリンバの魅力をいくつも違った角度から見せてくださるなんて…。聴く側からすればこんなに贅沢な、そしてうれしいコンサートはありません。

せっかくですから、それぞれの聴きどころをワンポイントアドバイスしてみたいと思います。

まずソロについて。

無伴奏ソロは今日のプログラムにはありませんが、2本の手に5本も6本ものバチを持って、メロディーはもちろんのこと、ベースから伴奏の和音まで奏きこなしていくのです。しかも、メロディーラインを奏くバチと、ベースラインのバチの硬さを変えてあったりと、よく聴くと一見地味なスタイルですが、いろいろな細かい配慮がみられます。

ここに1台ピアノが入るとどうでしょう。

ピアノとマリンバという組み合わせは、もうすっかり定着したスタイルになっていますが、相性について言えば、中高音域の音質がよく似ているので、『歌とピアノ』や『弦楽器とピアノ』といった組み合わせほどにはしっくりいっていないように思えます。

しかし、伴奏部分をピアノが引き受けてくれるので、マリンバはメロディー楽器として自由闊達に動き回ることになります。ソロとしての主導権をにぎり、ヴィルトゥオーソ的な活躍をする。——マリンバの輝きが一番感じられるのが、この伴奏付きと言えましょう。

そしてマリンバデュオになると…。

マリンバのシンプルな音色の良さを失わず、かつソロより自由な雰囲気が漂います。決して派手ではないけれども、お互いがメロディー楽器としての特性を生かした演奏で、聴く側はとてもしらックスした状態で受け入れやすいと思います。

今日のプログラムでもデュオから始まっていますが、明瀬さんの周到的な気配りが感じられます。

最後にトリオについてです。

中南米のマリンバでは、トリオが一番オーソドックスな形ですが、それぞれのマリンバに2～3人の人が付き、ある人は最高音部、その隣の方はそれより少し低めの高音部、というふうにして、大勢で一緒に奏く習慣があります。一人一人の受け持つ音域はせいぜい1オクターブくらいなので簡単に奏けて、だから楽しめて、お祭りには欠かせない楽器です。

今日のマリンバトリオは、少しくらい難しい音符でも平気で奏いてくださる方たちばかりなので、本場のマリンバトリオより、はるかに複雑な音がしますが、やはり『楽しい』ことに変わりはありません。

小品集の最後の3曲にはピアノも加わってますます賑やかですから、心ゆくまで音楽を楽しんでいただけたと思います。

ソロ、デュオ、トリオ、それぞれが魅力的ですが…。

さて、あなたはどれがお気に召しますか？